

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、良好な河川の保全・再生が創り出す健全な水循環系及び歴史・文化と共存する地域社会の実現に向け、河川再生について共に考え次の行動へと後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動しています。また、「アジア河川・流域再生ネットワーク（ARRN）」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時に海外の素晴らしい取り組みを日本国内に還元する役割を担います。

目次

	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ 会員寄稿記事	6
➤ 会議・イベント案内	18
➤ 書籍等の紹介	18
➤ 会員募集中	19

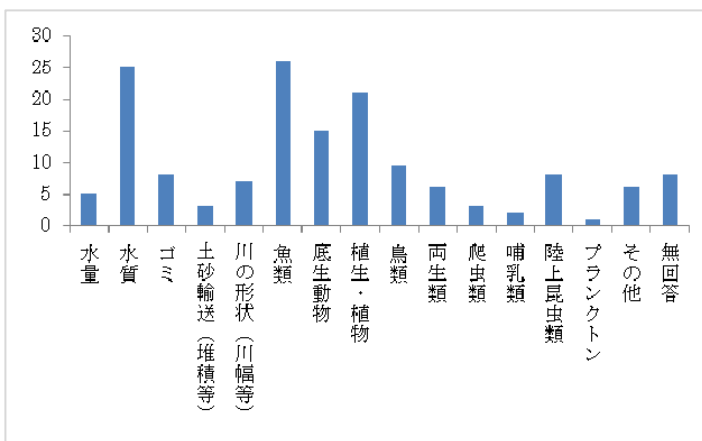
JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

「河川再生に関わるモニタリング活動アンケート調査」お礼 及び モニタリング事例集発行に向けた今後の予定

JRRN では、河川再生に関わるモニタリング活動の更なる推進に向け、「PRAGMO—河川及び氾濫原再生の順応的管理に向けたモニタリングの手引き」日本語版を昨年 11 月に発行しました。本年は、この PRAGMO 日本語版を活用し、日本国内における河川再生に関わるモニタリング活動の特徴や課題を皆様と共有することを目的に、筑波大学白川（直）研究室「川と人」ゼミと連携し、「河川再生に関わるモニタリング活動事例集（仮題）」の製作に取り組んでおります。

本活動の一環として、8 月～9 月にかけて、全国の河川環境改善に取り組む市民団体の皆様へモニタリング活動に関わるアンケート調査を実施させて頂き、北海道から九州まで 47 団体よりご回答を頂きました。夏場の川での活動で多忙な中、ご丁寧な回答を頂きました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

現在、皆様よりご回答頂きました内容の整理・分析作業を実施中です。



回答結果の一例（モニタリングの対象）※縦軸：団体数

10 月以降、「河川再生に関わるモニタリング活動事例集（仮題）」への掲載許可を頂いた団体皆様には、個別事例として紹介するための写真等の追加情報の提供を JRRN 事務局より依頼させて頂きます。

また、アンケート結果に基づく日本の河川再生に関わるモニタリング活動の現状と課題分析に向け、一部の団体関係者及び河川管理者の方々へのヒアリングもこの秋に予定しております。

本活動成果を集約した事例集の発行は 2014 年 1 月頃を予定しておりますので、引き続き、皆様のご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

なお、本活動は、公益財団法人河川財団の河川整備基金の助成を受けて実施しております。



※アンケート趣旨説明やアンケート項目はこちら

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/308.html>

(JRRN 事務局・和田彰)

ARRN 主催「第 10 回水辺・流域再生にかかわる国際フォーラム」(9 月 10 日・中国成都市)開催報告

2013 年 9 月 10 日 (火)、ARRN 主催行事『第 10 回水辺・流域再生に関わる国際フォーラム』が中国成都市にて開催されました。今回のフォーラムは、第 35 回国際水理学会 (IAHR) の特別セッションとして開催されたもので、「中小河川における包括的管理」をテーマに、中国・韓国・日本から、河川再生に関する先進的な取り組みや課題が紹介され、会場全体での討議が行われました。

本フォーラムのプログラム及び各講演の概要を紹介させていただきます。

■ 第 10 回 ARR N 国際フォーラムのプログラム

第 10 回 アジア水辺・流域再生に関わる国際フォーラム

- (1) 日時: 2013 年 9 月 10 日 (火) 13:30~17:00
- (2) 場所: インターコンチネンタル センチュリーシティ 成都 (中国成都市)
- (3) 主催: アジア河川・流域再生ネットワーク
中国河川・流域再生ネットワーク
- (4) テーマ: 中小河川における包括的管理
(Comprehensive Treatment of Small & medium-sized rivers")
- (5) プログラム:
 - 13:30-13:50 開会挨拶等
 - 13:50-14:30 李建華 (中国・同済大学 教授)
講演題目: 魚類の生息地研究からの河川再生へのインスピレーション
(Inspirations to river restoration from fish habitat studies)
 - 14:30-15:10 土屋信行
(公益財団法人リバーフロント研究所 技術参与)
講演題目: 日本における失われた河川の再生
(Restoration of once-lost urban river - Focused on the case in Edogawa city, Tokyo Japan)
 - 15:40-16:20 YongUk Ryu (韓国・建設技術研究院)
講演題目: 運河再生の応答予測と適用性分析
(Channel response prediction for abandoned channel restoration and applicability analysis)
 - 16:20-17:00 Xiaosong Wang (中国・水利水電科学研究院 IWHR 教授)
講演題目: 小河川の再生事例調査とレビュー
(Case survey and review on the restoration of small river)
 - 17:00-17:10 閉会

■ 講演 1 : 「魚類の生息地研究からの河川再生へのインスピレーション」(李建華 同済大学 教授・韓国)

中国を横断する大河、長江では、特に下流や支川における水質悪化が問題視されており、漁による乱獲などの影響も相まって、魚類の多様性が脅かされています (Tiaoxi 河での魚類調査では、1 年間で 15 種 216 個体から、6 種 20 個体まで激減)。北 Tiaoxi 河では、魚類の多様性の高い生息地と河道特性 (流速、水深、底質など) に明確な関係が見られ、このような中小河川 (支川) では、無秩序な河川改修を避け、魚類の多様性の高いホットスポットを保全することが求められます。



無秩序な河川改修



魚類の乱獲

長江支川における問題 (中国)

■ 講演 2 : 「日本における失われた河川の再生」(JRRN 代表・日本)

東京都の江戸川区では、1900 年代当時、総延長 440km の河川・水路がありましたが、現在ではその多くが埋め立てられ、約 18km が残されるのみです。江戸川区では、住民の生活と密接な関係のあった、かつての親水空間を再生するため、日本で最初の親水河川整備がなされました。河川に流れ込む生活排水を切り離す下水道を整備した上で親水整備に着手し、再生した河川に市民が戻りました。現在でも、市民団体が自然観察や清掃活動を行っており、川をより良くする取り組みに積極的に関わっています。



整備前



整備後

日本で最初の親水河川整備（古川親水公園）

■ 講演 3 : 「運河再生の応答予測と適用性分析」 (YongUk Ryu 氏 韓国建設技術研究院)

韓国では、河川改修の結果、氾濫原の減少や生態系への影響、並びに、蛇行河川の減少や本川から切り離された旧河道などが問題視されています。そこで、旧河道の再生に着目し、米陸軍工兵隊 (U.S.Army Corps of Engineers) の SAM モデルを用いた解析により、本川が安定するための旧河道の河道諸元（川幅、水深、構内）の予測を行い、将来の河道デザインを決める有効な結果が得られました。



問題視されている本川から切り離された旧河道（韓国）

■ 講演 4 : 「小河川の再生事例調査とレビュー」 (Xiaosong Wang 教授 IWHR・中国)

中国政府は、中小河川の再生を重点施策として位置づけ、治水と環境保全の両立に着目した手引きを発行、2009～2015年で5,174の中小河川を対象とした再生プロジェクト（総延長 67,500km、予算 1,860 億元）を進めています。河川再生に関する経験や成功例を集約し、今後のプロジェクトに反映するため、4つの地域（安徽省、湖南省、浙江省、山西省）で事例調査を行っており、現地状況と技術レベルを考慮して河川再生のアプローチを定めること、自然の営力を活用して本来の水循環を回復させること、などの教訓が示されました。



河川・水辺再生のパイロットプロジェクト（中国）

全体討論では、「中小河川における包括的管理」をテーマに会場参加者と講師の方々との間で意見交換が行われ、中小河川において各国共通で問題視されている水量・水質の確保等について活発な協議がなされました。



フォーラム終了後の参加者による記念撮影

なお、本フォーラムの各講演資料は以下のホームページよりダウンロードできます。

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/234>

(JRRN 事務局・後藤勝洋)

「第 8 回 ARR(アジア河川・流域再生ネットワーク)運営会議」(中国・成都市) 開催報告

2013 年 9 月 10 日 (火) 午前、アジア河川・流域再生ネットワーク(ARR)の「第 8 回運営会議」が中国・成都市にて開催されました。

はじめに、Zhiping Liu・ARR 会長からの開会挨拶に引き続き、会議参加者の紹介、またこれまで 1 年間の ARR 及び日本・中国・韓国ネットワークそれぞれの活動が報告されました。続いて、ARR の更なる発展に向けた今後の ARR 活動計画として、以下についての審議と意見交換を行い、ARR 設立から 8 年目となる ARR 活動が始まりました。

- ・ ARR 河川再生ガイドラインの更新について
- ・ 欧州河川再生ネットワークとの交流促進について
- ・ 来年の ARR 国際フォーラム企画について
- ・ ARR 会員増加に向けた取り組み
- ・ ARR 活動資金について
- ・ 次期 ARR 事務局及び運営会議開催について 等



各国 RRN の 2013 年の活動報告や本会議参加者等は以下でご覧いただけます。

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/343.html>

(JRRN 事務局・和田彰)

「中国成都市郊外における河川・水網再生プロジェクト技術交流会」開催報告

2013 年 9 月 11 日 (水)～12 日 (木) の二日間に渡り、ARR 関係者による、中国成都市郊外の自治体が計画している河川・水網再生事業の現地視察及び自治体関係者との技術交流会を開催しました。

この取組みは、昨年の第 7 回 ARR 運営会議(2012 年 11 月)において、河川再生に関わる知識や技術の向上の一環として、実際に河川再生プロジェクトに ARR 関係者が携わり、その成果を共有していくことが有効との提案に基づき実施されたものです。

対象地域は、紀元前 3 世紀以降の灌漑水路網の整備により、四川省西部を代表する農業生産地となりましたが、近年、急速な都市化と人口増加により、水資源の減少、洪水頻度の増加、景観や生態系の悪化などの課題に直面し、水資源利用の合理化、治水と両立した環境保全対策が急務となっています。

自治体幹部と ARR 関係者との技術交流会では、日本が培った技術や施策、また具体事例の紹介などを通じ、歴史的な河川・水網再生に向けた助言を行いました。今後の更なる技術交流を進めてまいります。



(JRRN 事務局・和田彰)

海外における河川再生活動の受賞ニュース速報（国際河川賞 / 欧州河川賞 / 豪州河川賞）

オーストラリアに本拠地を置く国際河川財団 (International RiverFoundation) より、3つの河川賞 (Riverprize) が 2013 年 9 月に発表されました。

海外の優れた河川再生の取り組みを表彰する国際河川賞 (International Riverprize) には、最終選考 4 河川よりケニアの MARA 川が、またオーストラリア国内の優れた河川再生活動に授与される豪州河川大賞 (National Riverprize) には、最終選考 3 河川よりビク

トリア州の Glenelg 川が選ばれました。更に、本年より創設された欧州の優れた河川再生の取り組みを表彰するヨーロッパ河川賞 (European Riverprize) には、最終選考 4 河川よりライン川が最優秀賞に輝きました。

JRRN では、将来、日本の河川が国際河川賞に輝くことを一つの目標に、国内外関係団体との連携強化に努めてまいります。

(JRRN 事務局・和田彰)

※国際河川賞が発表された本年の国際河川シンポジウム（豪州・ブリスベン開催）の様子は、次頁にあります
※会員寄稿記事をご覧ください。

国際河川賞 2013（2013 年 9 月 24 日発表）： ケニア・Mara 川

ケニアを流れる国際河川・Mara 川が本年の国際河川賞を受賞し、アフリカの河川が選ばれるのは、約 15 年の国際河川賞の歴史において初となります。

流域内の水資源管理と環境保全に向け、明確な目標を掲げ、農家、市民団体、NGO、コンサルタントなどの関係者との強力なパートナーシップを築きながら河川再生に取り組んだことが評価されました。（賞金：約 2,750 万円）



※写真：International RiverFoundation ホームページより

■詳細（英語）：

http://www.riverfoundation.org.au/docs/2013_Thiess_International_Riverprize_Winner_Announced_FINAL.docx

オーストラリア河川大賞 2013（2013 年 9 月 24 日）： ビクトリア州・Glenelg 川

本年のオーストラリア国内の河川再生大賞にはビクトリア州を流れる Glenelg 川が選ばれました。

流域内の農家や市民グループ、また製造業関係者との連携により河川再生に取組み、1,600km に及ぶ川沿いへの 500,000 本以上の植樹や種まきなど、10 年以上に渡る地道な活動が評価されての受賞となりました。

（賞金：約 1,800 万円）



※写真：International RiverFoundation ホームページより

■詳細（英語）：

http://www.riverfoundation.org.au/docs/2013_IRF_European_Riverprize_Winner_Announced_FINAL

ヨーロッパ河川賞 2013（2013 年 9 月 12 日発表）： Rhine（ライン）川

初となる欧州河川賞には、約半世紀に渡り、流域内関係国及び機関が連携して統合的水資源管理を推進してきたライン川が受賞しました。

流域レベルでの都市排水管理による大幅な水質改善、また人口密集地域における治水と環境を両立させた統合的な施策の取り組みなどが評価されました。（賞金：550 万円）



※写真：International RiverFoundation ホームページより

■詳細（英語）：

http://www.riverfoundation.org.au/docs/2013_Australian_Riverprize_Winner_Announced_FINAL.docx

「第 16 回国際河川シンポジウム(2013 年 9 月 23～26 日・豪州ブリスベン)」参加報告

寄稿者：Yoshi（クイーンズランド大学・JRRN 会員）

国際河川賞等の内容については JRRN の事務局からご報告があると思いますので、第 16 回国際河川シンポジウム（ブリスベン、2013 年 9 月 23～26 日）について気がついた点をいくつか報告します。

参加者については、アフリカ、南アジアからの参加者が増えたような気がしました。南アジアからは、スリランカ、バングラデシュ、インドからの基調講演もありました（アジアからの基調講演は、これらの他には中国からありました）。アフリカからは以前からも参加者がありましたが、今年は、国際河川賞のファイナリストの河川があったことから存在感が増していたのかもしれません。国際河川賞のファイナリストには、フィリピン、ロシア、コンゴ、オーストラリアと多くの地域からの応募河川が含まれていました。

生態系保全、河川環境保全のための政府（国だけではなく、日本の都道府県、市町村に相当する機関を含む）、流域管理局（Catchment Management Authority, CMA）、流域保全ネットワーク（NGO）等の組織の役割、河川流域の生態系保全等のテーマの発表が多く見られた他、河川水質、流域からの汚濁物質の排出量、汚濁負荷排出量削減対策に関する発表もありました。

スタディーツアーは、サウスブリズベンの洪水調整施設（写真 1）、クイーンズランド大学の太陽光発電施設（写真 2）、流域保全の環境 NGO によるネイティブ植物の苗の育成やガーデニングの活動（写真 3）、洪水時の汚濁物質スクリーン施設（写真 4）、ブリスベン美術館のブリスベン川をテーマとする特別展の見学を行いました。



写真 1

ブリスベンでは、最近では 2011 年に大きな洪水がありました。その年の 10 月にサウスバンクにレインバンク（洪水調節施設）が設置されました。ポンプ施設、貯留施設、水処理施設が組み合わされており、公園用地の地下部分を利用して設置されました。公園用水の 85%をこれらの施設の水でまかなうことができるような規模となっています。クイーンズランド州洪水産業協会のインフラ優秀賞、ヘルシー・ウォーターウェイズの近代都市設計賞等を受賞しています。



写真 2

UQ（クイーンズランド大学）センタービルディングの屋上からセントルシアキャンパス中央を望む。UQ センター屋上には、太陽光発電パネルが前面に貼られている。最近完成した新しい建物の 1 つでは建物の使用電力の 100%以上を太陽光発電で発電していて、もう 1 つの建物では使用電力の約 20%の発電量となっています。ガットンキャンパスでは、太陽光発電によりキャンパス全体の全使用電力をまかなう計画が進められています。



写真 3

ネイティブ種の苗を環境 NGO、ナンダ・コミュニティが育成しています。ブリズベン川の流域ではクリーク（支流）単位で、環境 NGO のネットワークが整備されていて、各クリークで複数のブッシュケアグループ（流域の植生保全を主な活動内容としているグループ）が活動を行っています。ナンダ・コミュニティの育成した苗は、主にオクスレイ・クリーク流域のブッシュケアグループが各活動地域で、流域に植生しています。



写真 4

グリーンスロープの洪水時のスクリーン施設。コンクリートで囲まれた部分（白く縁取られているように見える）がスクリーン施設。スクリーン施設の手前左側に洪水の越流水の流入口があり、右、さらに奥に続いている白っぽい部分がメインの流路として想定されている部分で、植物の苗が植えられ、ジュートのメッシュで保護されています。メイン流路の両側はマルチ（枝や葉）が敷かれています。写真では見にくいですが、傾斜があるとともに、画面右奥にはマウンド（丘）があり、流量が大きい場合にはマウンドに当たって、傾斜に沿って左に曲がり、メイン流路に流れるように設計されているようです。完成したばかりで、まだ大きな洪水はありません。このようなスクリーン施設が、ブリズベン市内 8 か所に設置される計画です。

来年はオーストラリアの首都キャンベラでの開催が予定されています。全体テーマは、首都での開催にふさわしく大規模河川、複数地域（国）を流れる河川が予定されています（今年は、「水、エネルギー、食料をつなぐ河川」でした）。事務局に確認したわけではありませんが、大規模河川は、大陸の大規模河川の他、日本における大規模河川も対象になるでしょう。越境河川についても、オーストラリアでは、ムライ・ダーリング川はオーストラリア国土全体の 40% を流域としていて、クイーンズランド州、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州、サウスオーストラリア州の 4 州にまたがる越境河川という認識もあります。複数の州や地域の間で水資源の調整等が行われています。日本でも、複数地域あるいは複数の都道府県を流れる河川で、地域間、都道府県間の水資源の調整や、流域を越える水資源の移動があるような場合には全体テーマの対象になるでしょう。

例年の日程であれば 10 月以降に、来年の大枠が国際河川財団のホームページで公開されると思われます。詳細については国際河川財団に直接問い合わせただくことも可能です。（全体テーマと国際河川賞の関係については明確ではありませんが、今年の国際賞の受賞河川がアフリカの河川であったことは、選考委員の方々が選考過程で全体テーマをある程度意識されていると言えるかもしれません。）

※「第 16 回国際河川シンポジウム」ウェブサイト



<http://riversymposium.com/>



川系男子の『川と人』めぐり No. 18～北陸地方の川～

坂本貴啓（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしょうがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

♪更け行く秋の夜 旅の空の わびしき思いに 一人悩む

恋しや故郷 懐かし父母 夢路にたどるは 故郷の家路

（唱歌『旅愁』 訳詩：犬童球溪，作曲：ジョン・P・オードウェイ）



図1 大日ヶ岳（庄川・長良川流域界沿い）を登山



図2 庄川河口の解散式

1. 旅のおわりは新たな旅のはじまり

2013年8月28日（水）～31日（土）に庄川にゼミ合宿に行った。ゼミ合宿は毎年夏の終わりに行われる『川と人』ゼミの恒例行事で一つの川を3泊4日で旅する。僕がゼミに入ってから米代川（2010年）、天塩川（2011年）、那賀川（2012年）で今年は庄川。今年は旅の仲間に島根大と神戸大の河川の研究室も加わり、19名ととても賑やかな旅となった。

長良川から流域界を越え、庄川流域にはいる。大日ヶ岳を登り、尾根線沿いに庄川と長良川の分水嶺を感じ、上流域ではいくつもの連続した発電ダム群、中流域では流域内に残る合掌造りの集落、下流域では砺波平野の黄金色に色づいた散居村集落を望む。そして4日間旅して最後に辿りついたのは庄川の河口。河口で行われる解散式は先生がただ一言「では、解散！」と言ってあっけなく終わる。同時に夏の終わりが来ていることを知る瞬間でもある。今年は解散直後仲間と別れ、夏の終わりの北陸地方の自身の河川調査をスタート。旅の終わりは新たな旅のはじまりである。

表1 北陸地方の『川と人』めぐり訪問先

日付	午前	午後	訪問先
8月28日（水）	ゼミ合宿in庄川流域	ゼミ合宿in庄川流域	
8月29日（木）	ゼミ合宿in庄川流域	ゼミ合宿in庄川流域	
8月30日（金）	ゼミ合宿in庄川流域	ゼミ合宿in庄川流域	
8月31日（土）	ゼミ合宿in庄川流域	小矢部川 手取川	小矢部川に学ぶ会 はりんこ塾
9月1日（日）	黒部川（上流）	常願寺川	黒部ダム 常願寺川の清流と桜を愛する会
9月2日（月）	常願寺川 梯川	神通川 黒部川	金沢河川国道事務所 石川県庁 富山河川国道事務所 富山県庁 くろべ水の少年団
9月3日（火）	黒部川	姫川 関川	黒部川河川事務所 生地の湧水 高田河川国道事務所 関川水辺クラブ
9月4日（水）	千曲川（信濃川）	信濃川	千曲川河川国道事務所 長野県庁 信濃川河川事務所 分水桜を守る会 大河津分水路
9月5日（木）	信濃川	阿賀野川	信濃川下流河川事務所 新潟県庁 北陸地方整備局 NPO法人新潟水辺の会 阿賀野川河川国道事務所
9月6日（金）	荒川	阿賀野川	神林さくらの会 清流荒川を考える流域ワークショップ 羽越河川国道事務所 阿賀川河川事務所
9月7日（土）	阿賀川（阿賀野川）	阿賀野川 つくば着	会津阿賀川流域ネットワーク 川の達人の会 猪苗代湖 NPO法人五泉トゲソの会



図3 小矢部川と小矢部川防災センター



図5 バケツをひっくり返したような大雨の手取川



図4 庄川と小矢部川の旧河道



図6 トミヨ（写真：はりんこ塾 HP より）

3. 手取川のトミヨ（はりんこ塾/美川自然人クラブ）

小矢部川をあとにし、石川県白山市付近の手取川へ。手取川についた時には大雨で視界が曇っていた（図5）。

手取川流域で活動する『はりんこ塾/美川自然人クラブ』の藤木克彦さんにお会いした。率直に藤木さんに「はりんこって何ですか？」ときいてみた。はりんこはトミヨ（図6）の地方名で、白山市（旧美川町）付近では「はりんこ」と呼ぶらしい。トミヨは背に7～10本のとげをもつ5cm前後の1年生の魚で、夏でも水温20℃以下の冷たい水のある湧水の湧き出るところでしか生息できない。産卵期の4月～7月には婚姻色で黒っぽくなり、縄張り・巣をつくり、子育てまでする。たった1年しか生きられない魚でかつ限定的な条件のもとでしか生きられない魚であるため、自然の健全さを知るバロメーターになるという。

そんなはりんこが棲む、この白山は豊富な自然を味わいに外から人に来てほしいという想いをこめて、はりんこをテーマとしたまちづくりを1993年から展開することになり、活動を『はりんこ塾』と名付けたという。

湧水を活かしたまちづくりをすすめて、2010年には「白山美川伏流水群」が平成の名水百選に指定され、活動にも再度熱がはいり、伏流水案内マップや案内看板の作成などがすすめられている。

はりんこをシンボルとした清らかな水を育むまちづくりが展開されている。

2. 小矢部川と自然体験（小矢部川に学ぶ会）

解散後、庄川の隣の流域の小矢部川へ。小矢部川はもともと庄川とつながった川であったが、江戸時代の改修工事により、庄川から小矢部川は独立した水系となった（図4）。現在は庄川の合口堰などで取水された用水が田畑を潤したのちに、排水路を通り、庄川には戻らず、小矢部川に水を落している。分離された今でもこの2つの川は密接な関係を持っている。

そんな小矢部川には『小矢部川に学ぶ会』があり、訪ねた。小矢部川に学ぶ会は2002年に小矢部川の左岸側に福岡防災センターができたことをきっかけとして、発足。代表の吉田孝さんは、幼少の頃からこの小矢部川の流域で育ち、初夏にはコイやフナを捕まえ、夏には川遊び、秋にはミクリの実をとり、冬にはバイカモの花を見て育った記憶があるという。そういう経験を今の子供達もさせてあげたいと活動を開始した。四季折々の自然活動を体験させる中でジュニアナチュラリストの子供達を何名も育ててきた。小矢部川で育った子供達が将来どんな活躍をしていくのか楽しみである。



図7 霧雨の黒部ダム



図9 ダムを忠実に再現した黒部ダムカレー



図8 念願の黒部ダムカード（レアカード）



図10 念願かなって記念撮影

4. 壮大なロマンの黒部ダム（黒部ダム）

9月1日。夢にまでみた黒部ダム。中学生の頃、NHKのプロジェクトXでの黒部ダム建設のドキュメンタリーを見て以来、あこがれ続けてきたダムである。2002年の紅白歌合戦で中島みゆきさんが黒部第四発電所のトンネルの中から「地上の星」を歌ったのにロマンを感じた人は多いのではないだろうか。当時はダムのことはなんとなくしか分らなかったが、子どもながらにこのダムはとてつもないダムなんだということだけは分かっていた。

ご存じの通り、黒部ダムは山奥深くにあるため車を自分で運転して行くことができない（自家用車を持っていく場合は回送サービスを利用する必要がある）。アクセスするためには全部で3つのルートがある。一つは「黒部ルート」と呼ばれるもので、ダム管理者である関西電力所有のトンネルによる輸送設備を利用したものがある。しかし、これは黒部ルート見学の抽選に当たった人だけが利用できるルートで一般開放はされていないので、現実的にアクセスは難しい。よって黒部ダムには他のダムに行く時のように川を遡っていくことができないため、他流域から山越えをしてアクセスすることになる。

二つ目は「扇沢ルート」。長野県信濃大町から路線

バスに乗って、扇沢でトロリーバスに乗り換え登って行くルートである。コストも安く、アクセス時間も短い便利なコース（片道所要時間16分、料金往復2,500円）。3つ目に「立山黒部アルペンルート」。立山駅からケーブルカー⇒高原バス⇒トロリーバス⇒立山ロープウェイ⇒黒部ケーブルカーと長時間コースがある（片道所要時間:79分、往復料金:10,490円）。今回は北陸にいたので、こちらからアクセスした。車窓からだけでも立山連邦は見事であり、険しい渓谷、長いトンネルを抜けていながら黒部ダムへの期待が深まるにつれ、よくこんなところにダムをつくったものだと感心する。

黒部ダムについていた時には小雨が降っており、霧が立ち込めていた。霧の中見えてきたダムサイトからの放流は迫力が一段とあった（図7）。ダムサイトの横には殉職者慰霊碑が建っていたが、この過酷な自然環境の中に創り出したのは決死の覚悟が必要だったであろう。ダムの放流を眺め、ダムカード（図8）を手に入れ（売店でアンケートに答えるとももらえるレアカード）、ダムカレー（堤体はアーチ式ご飯でエメラルド色のダム湖を表現したグリーンカレー）（図9）を食べて大満足の黒部ダムであった。日本の土木技術者あっぱれ！

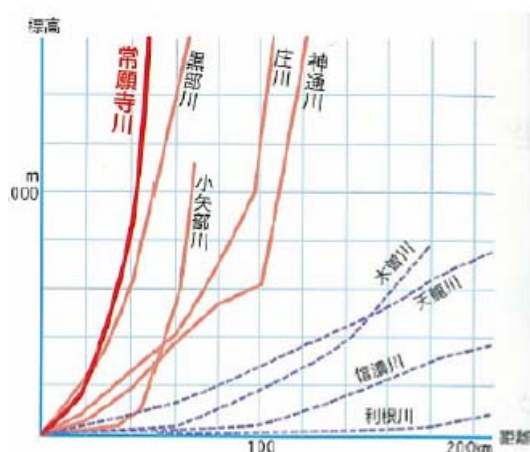


図 11 常願寺川の河床勾配(河川整備計画より引用)



図 12 常願寺川の床固群

5. 日本一の河床勾配の川（常願寺川の清流と桜を愛する会）

黒部ダムを後にし、立山に戻ってきた頃には夕方。時間があれば立山砂防博物館など見学したかったがまた次の機会に。立山は日本三大崩れでも有名な崩壊地であり、そこを流れる常願寺川も砂防対策が施された河川である。明治時代、常願寺川の改修に訪れたヨハニス・デ・レーケが「これは川ではない、滝だ！」と言ったのは有名な話として残っている。ご存じの通り、日本の河床勾配の中で最も急勾配なのがこの川である（図 11）

また、廃藩置県の際に石川県と富山県は一緒だったが、常願寺川に災害が多いことから石川県と富山県は再び分離されたという。そんな荒々しい常願寺川の上流部を橋の上から覗き込むとそう言われるのがすぐに納得できた。そんな常願寺川で活動する『常願寺川の清流と桜を愛する会』の永山國男さんにお会いした。この会は 2005 年に発足。建設省（当時）が岩峯野桜つつみモデル事業を進める際に川づくりに対する住民の意見を聴く集まりを常願寺川上流右岸、立山町末三賀、野村、岩峯野、泊新地区の住民で発足。現在は独立した市民団体として、岩峯野地区の床固め（図 12）付近での水生生物学学習や花見の拠点として賑わいを見せている。



図 13 生地の湧水

6. 名水の里で（金沢河川国道事務所/石川県庁/富山河川国道事務所/富山県庁くろべ水の少年団）

9 月 2 日。この日は忙しい日であった。午前中に金沢河川事務所、石川県庁へ行き、手取川と梯川に関する情報提供をしてもらい、午後からは富山河川国道事務所、富山県庁へ行き、常願寺川、小矢部川、庄川、神通川に関する情報提供をもらった。各機関のご協力もあって調査の方も順調である。途中、富山に来てから神通川を見てなかったもので、堤防に這い上がり、ちょっとだけ記念撮影。富山空港は神通川の河川敷に滑走路があるそうだが、使ったことがないのでぜひ一度使ってみたい。

金沢⇒富山と移動し、この日は黒部を終着に。夜、『くろべ水の少年団』の吉崎嗣憲さんにお会いした。くろべ水の少年団は 1993 年から活動をしている会で、黒部市付近の小学生の水環境教育に関する活動を中心に活動している。水の少年団という名前がなんともカッコいい！行っている活動の内容も非常に科学的である。水質測定の見学機器の使い方や水生生物の同定、実顕顕微鏡の操作方法など幅広いメニューがある。最近の環境学習は自然を体験して完結するものが多く、本格的な理科的指導にまで発展した活動を行っているものは少ないように思う。これが可能なのも、会を運営しているのが理科の先生達を中心であるためだろう。

黒部と言えば名水なしでは語れない。大学のある水文学の先生が言っていたが、「黒部の水を 1 週間飲むとなんだか体の中の水分が全て入れ替わるようですがすがしい気分になるんだよね。」なるほど、これは分かる気がする。次の日には生地の湧水（図 13）を見学。海付近でありながら自噴している湧水群で、奥から飲料、野菜洗い、食器洗い、選択と洗い場に順序がついている。水も冷たく柔らかい触感でおいしい。

余談だが、9 月 2 日は自身の誕生日。26 歳。去年は仁淀川の一人旅で誕生日を迎えたが、今年は黒部川で後輩に誕生日を祝ってもらった。名水のもとで最高の誕生日を迎えた川系男子なのであった。



図 1 4 夕暮れ時の関川

7. 関川の夢（黒部河川事務所/吉田科学館/高田河川国道事務所）

9月3日、午前中に黒部川河川事務所を訪問し、その後黒部川や吉田科学館、生地の湧水を見学した。今回調査で同行してくれた後輩は黒部川が地元であり、名水で育った彼女がちょっとうらやましくもある。

黒部を十分堪能したあと、新潟県上越市方面へ。高田河川国道事務所へ行き、姫川と関川の説明を聴く。また、事務所の数名の方も関川水辺クラブの会員であるそうなので、色々とお話を伺った。関川には『NPO 法人関川水辺クラブ』がある。関川水辺クラブは2000年の建設省（当時）主催の「関川・川づくりワークショップ」で川づくりを考える機会に自由に関川についての夢を語り、関川の水辺がこうあってほしいという夢を絵に描いた。集会で集まったメンバーがその後も活動していこうと『関川水辺クラブ』を設立。その後も活動を続け、2002年に法人格を取得。現在も関川の代表的な団体の一つとして活動が続けている。

ん？ちょっとまてよ。この流れは僕の地元の遠賀川の直方川づくり交流会（1996年）の設立経緯によく似ている。50年後の遠賀川についての夢を行政も住民も一緒になって考え、遠賀川夢プランを提案している。その後、任意団体の直方川づくり交流会から分化するかたちでNPO法人直方川づくりの会を設立。この関川も住民参加で水辺をデザインしたというものだそうだ。九州と北陸なので、きっとお互いを意識したわけではないだろうが、同時期に同じプロセスを辿った団体であり、興味深い。

当時ワークショップで提案した内容は実際のところ2割程度しか実現はしなかったようだが、カヌー乗り場などは今でも関川で活動する時の発着拠点になっているようで、利用者も多い。少し夕暮れ時の関川を見学（図14）したが、堤防沿いを散歩する人が多く、川と住民の距離の近いものであった。関川に描いた夢はここに息づいている。



図 1 5 大河津分水洗堰（信濃川本川側）

8. 千曲川・信濃川（千曲川河川事務所/長野県庁/信濃川河川事務所/認定NPO法人分水さくらを守る会/大河津分水/）

9月4日、昨晚のうちに高田から一旦長野県長野市へ。午前中に千曲川河川事務所と長野県庁を訪問し、情報収集。その後は千曲川沿いを電車で下り、中流域の信濃川河川事務所へ。その後、燕市の燕市方面へ向かい、大河津分水へ（図15）。大河津分水は1922年に完成した日本有数の分水路である。また、信濃川本川の下流にはもう1本、関屋分水路もある。竹村公太郎さんの土地の文明の一節では、「2本の分水路はそれぞれの役割を分担して、新潟平野の洪水を防止し、新潟平野の洪水を防止し、新潟平野の水はけを良くして日本海側最大の都市・新潟を誕生させていった。」とある。堤内一面に広がる黄金色の稲の平野はこの分水路なしでは成しえないものである。

そんな大河津分水で活動する『認定NPO法人分水さくらを守る会』を訪問。この会は2004年に設立した会で、大河津分水路堤防沿いの桜並木の手入れや植樹などを行っている。4月には見事な桜が堤防一面に咲き、多くの人で賑わうそうだ。2010年には認定NPO法人まで取得している。こうした河川管理は継続的にしていくのは手間もコストもかかり、全国的に課題になっていることが多いが、市民による堤防の管理が行われていることは大変すばらしい事例だと思う。

9. 記憶される美しい水辺の創造目指して（信濃川下流河川事務所/北陸地方整備局/NPO法人新潟水辺の会/阿賀野川河川事務所）

次の日（9月5日）、信濃川下流河川事務所と北陸地方整備局と新潟県庁を訪問した後に『NPO法人新潟水辺の会』を訪問。前々から各所で話を聞いていた会だったので念願叶っての訪問であった。

当日は会の代表であり、新潟大学の名誉教授の大熊孝先生、副代表の相楽治さんが対応して下さった。新潟水辺の会は1987年設立の会で（僕と生まれ歳が一緒！）、信濃川流域を中心として鮭の稚鮭の放流や



図 1 6 新潟水辺の会でのヒアリングの様子



図 1 8 荒川河川敷を流れる小川と桜

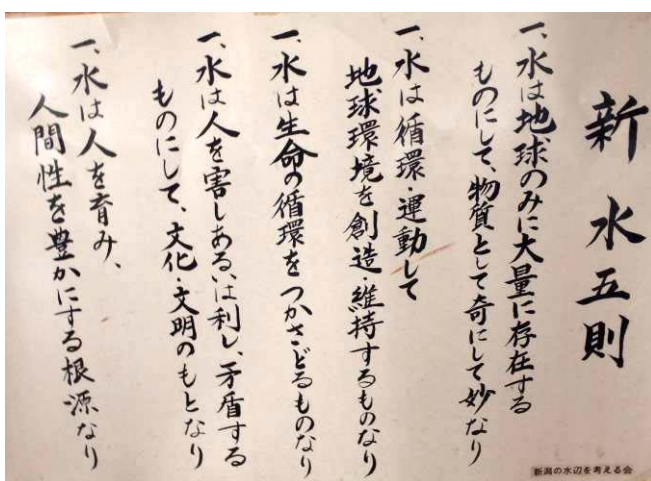


図 1 7 新水五則（大熊先生著）



図 1 9 自然再生事業で復元した湧水の湧くワンド

流域の各種調査などさまざまな活動を行っている。

設立は宮崎駿監修・高畑勲監督の「柳川堀割物語」の上映とシンポジウムの開催をきっかけとして、新潟県内の水辺環境について考える目的で発足。「柳川堀割物語」は福岡県の柳川の水路再生の話であるが、新潟で福岡の川の事例に着目して発足しているのは発足経緯として興味深い。

新潟水辺の会の拠点の「みずきのハウス」で色々とお話を伺う（図 1 6）。話が楽しく、あっという間に 2 時間以上経ってしまった。大熊先生から「今度ゆっくり来なさい。今度きたらここに泊めてあげよう。」遠慮なくそうさせてもらおう。最後に、部屋の一角に貼ってあった新水五則をみつけ、大変興味を惹かれた。水五則は黒田孝高（如水）がつくったものと言われ、以下のような水の性質を説いている。

一、自ら活動して 他を動かしむるは水なり
 一、常に己の進路を求めて止まざるは水なり
 一、障害にあい 激しくその勢力を百倍し得るは水なり
 一、自ら潔うして他の汚れを洗い清濁併せ容るるの量あるは水なり
 一、洋々として大洋を充たし 発しては蒸気となり雲となり雨となり雪と変じ霞と化し 凝っては玲瓏たる鏡となり 而もその性を失わざるは水なり

（水五則：黒田孝高）

新水五則は大熊先生が説いたもので大変参考になるものだったのでここに掲載する（図 1 7）。

10. 湧水を活かしたワンドの自然再生（清流荒川を考える流域ワークショップ/神林さくらの会）

9 月 6 日、新潟県の村上市荒川から、荒川という川は全国各所にあるが、1 級水系としては関東を流れる荒川と北陸を流れる荒川の 2 つがある。『清流荒川を考えるワークショップ』の佐藤巧さんと『神林さくらの会』の佐藤治夫さんにお話を伺った。両会とも荒川の川づくりやまちづくりをどのように進めるかを考えることをきっかけにスタート。荒川では河川敷にオーナー桜を植えており、桜 1 本 1 万円でオーナーになる制度だ。オーナー桜はその後、会の人々が中心となり、しっかりと育成している。また、河川敷は公園利用できるようにしっかりと整備されていて、支流の小さな川も合流してきている（図 1 8）。

お話を伺った後、羽越河川国道事務所に行き、お話を伺っていると川づくりの現場を案内していただいた。河川敷として埋められてしまったワンドを湧水の湧き出る場所を掘削して復活させ、湧水の湧くワンドがトミヨの貴重な生息場になっている

（図 1 9）。ワンドの自然再生は日本各所で聞くが、数年後にはたまり水になり、水質が悪化する例もある中、ここは成功事例としてモデルケースであるべきだろう。



図 2 0 所長と事務所の方と記念撮影



図 2 1 住民団体による草刈りが行われる阿賀川

1 1. 阿賀野川と阿賀川（阿賀川河川事務所/NPO 法人会津阿賀川流域ネットワーク/NPO 法人五泉トゲソの会）

荒川を後にし、北陸調査最後の河川の阿賀野川流域へ。阿賀野川を上流の会津若松の方までさかのぼる。阿賀野川は福島県に入ると、阿賀川と呼ばれる。阿賀野川を遡って行くと風光明媚な山間の風景に変わっていった。しかし、会津若松に入った途端に平野が開けた。上流に登っていたはずなのに違和感のある印象。会津若松は盆地なのだ。盆地を貫流し、その後、勾配を急にして、新潟の方へ流れる。平日の金曜日最後の訪問先として、阿賀川河川事務所へ。担当者の方のもとを訪ねて、お話を伺おうとすると、「その前に、うちの所長がちょっと会いたいと言っていますので、所長室へどうぞ。」ん？ボク、何か悪いことしたかな？北陸最後の事務所にして、川系男子、とうとう北陸河川のブラックリストに載ってしまって、怒られるのか？恐る恐る所長室へ。「やあ！坂本君！久しぶり！私のこと覚えているかい？」一瞬頭が点になってしまったが、聞き覚えのある声と見覚えのあるお顔。記憶はすぐに蘇ってきた。昔、4年生の頃につくばの国総研の河川環境研究室に夏期実習で行った際にお世話になった池田さん

だ！「君が全国調査で周っていることを聞いたんでね、元気かなと思って。」これはうれしい再会だった。実は阿賀川以外でも、信濃川河川事務所でも以前国総研に勤めていた人が課長さんとして赴任されており、「坂本君が来るってきいてびっくりしたよ！」当日は出張で会えないけど、何か知りたいことなどあればいつでも言ってね！」とうれしいお言葉をいただいた。川の縁は本当に素晴らしいものだと思身に染みて思う。これからもご縁を大事にしていきたい。

事務所長から激励を受け、その後、色々と阿賀川に関する説明を受けた後に、事務所を後にした。

翌日（9月7日）に『NPO 法人会津阿賀川流域ネットワーク』を訪問。代表の高橋利雄さんを訪ねた。

会津阿賀川流域ネットワークは川に学ぶという理念のもと、会津地域の発展に寄与することを目的に活動する団体である。2004年に設立。この会がすごいのは「河川管理は民の力でやれることはやる」ということ。もともと、会津地方の阿賀川は昭和30年代から河川の草刈りなどの河川管理は川の各地区の自治組織で行ってきた。その伝統は今でも引き継がれており、国の管理区間の草刈りは住民の手によって行われる（図21）。それを円滑に行えるように調整し運営を行っている。いま全国の河川の中で住民による河川管理がここまで徹底している川はどれくらいあるだろうか。おそらく阿賀川くらいだろう。今後、人口減少社会の到来で河川管理が同水準で行えるか懸念がある中、このような活動は新しい時代の河川管理の方策に一石を投じるかもしれない。

その後、阿賀川をもう少しだけ遡り、猪苗代湖へ。先月、東北地方調査の際にも猪苗代湖に来たが、東部の安積疎水側だったが、今回は阿賀野川への流出口である西部の方へ。阿賀野川のはじまる湖に敬意を表し湖を後にした。

最後に向かったのは五泉市にある『NPO 法人五泉トゲソの会』。常務理事の中村吉則さんのところでお話を伺った。

このトゲソというのは、イバラトミヨのことで、このあたりの地方名でトゲソと言うらしい。手取川でははりんこだったが、ここも異なっていて面白い。

この会では周辺の湧水群に生息するトゲソを守るため、生息調査を行ったり、繁殖用の水路をつくったりする活動を2006年より行ってきた。トゲソを通じて人々に伝えられることはたくさんあると中村さんは言う。「トゲソは売ることも食べることもできない。飼うこともできない。でもお金に換えられない価値がある。」トゲソという限られた環境の中でしか生きられない魚だからこそ、環境の変化に敏感で、人が普通に生活している分には気がつかない微妙な変化をいち早く感じ取ってくれる。

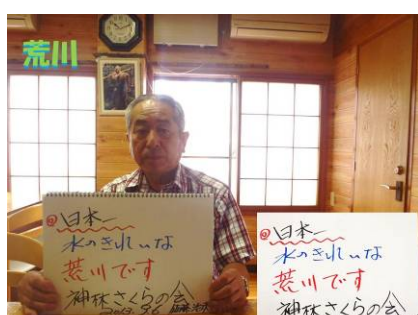
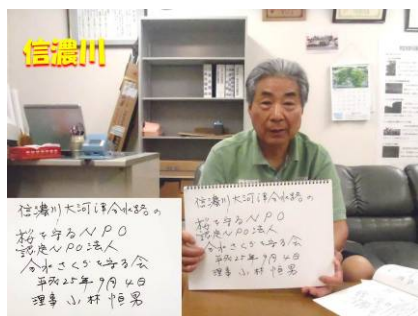
最近では、トゲソ米というブランド米をつくって販売し、その売上げの一部を活動費に充てるというユニークな活動も展開されている。

トゲソという魚に学び、北陸地方の川を後にした。

12. 旅のおわりに

今回、ゼミ合宿まで入ると11日間（8月28日～9月7日）の北陸地方の訪問であった。秋の北陸地方はどこも稲穂が黄金色に広がり、流域の豊かさを表していた。今回各流域を周るに当たり、お世話になった市民団体の方、行政の方への感謝はもちろんのことだが、各河川の事務所の紹介や各河川の市民団体の情報のとりまとめをして、北陸地方の調査をサポートして下さった北陸地方整備局の横山優樹さんに感謝申し上げる。僕と同年の河川管理者が日々北陸の川のために仕事をしているのは素直にかっこいい。僕も日本の川のために今自身にできることはなんなのか自問自答をせずにはいられなかった。今回の調査で九州、中国、四国、東北、北陸を一通り巡り、不十分さはありつつも65水系情報を集めてまわったことになる。109水系まであと半分を切った。新年の誓いは実現できるのか？いや実現してみせる。

最後に今回ゼミ合宿後そのまま北陸地方の調査に同行してくれた能登江梨香さん、井坂七星さん、木村夏菜さんありがとう。



- ・滞在日数:7日間(ゼミ合宿入れて11日間)
- ・ダムカード獲得枚数:2枚
- ・訪ねた川の学習館等:0施設
- ・訪ねた河川事務所:9機関
- ・訪ねた川:12水系
- ・名刺交換した人数:44名
- ・出会った市民団体:10団体
- ・出会った行政の人:29名
- ・旅で出会った人:約100名

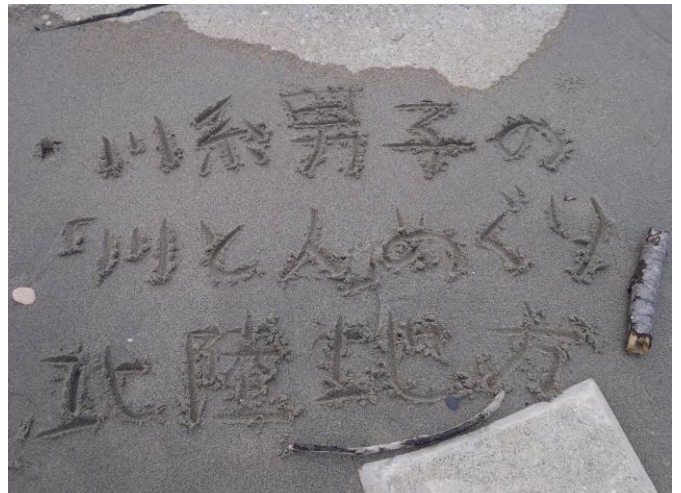
川系男子の 北陸地方『川と人』めぐり



完



地図: 国土交通省 日本の川HPより引用



【筆者について】

坂本 貴啓 (さかもと たかあき)

1987 年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC (青少年博物学会)、大学時代ではJOC (Joint of College) を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢めている。

筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには秋の川らしさを探すこと。

水辺からのメッセージ No.53

岡村幸二 (JRRN 会員)

内藤新宿の新しい分水： 御苑の散歩道に生まれた水の流れが新たな涼しさを呼ぶ



撮影：2013 年 9 月（東京都・新宿区内藤町）

◆玉川上水を彷彿とさせる分水の軌跡

江戸時代にはこの地に玉川上水が流れて、大木戸水番屋から暗渠により江戸市中に送られました。今回できた内藤新宿分水は約 1m の水路幅と 5～1cm の水深の新しい“分水”です。水源は甲州街道の地下トンネルの地下水がポンプアップされます。

かつて延焼防止林であったシイ・カシ林の木陰とともに、流れによる涼しさも感じられるようです。全長 550m にわたる玉川上水の新しい分水を見学するために、遠方からも人が訪れます。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)

(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

■第 9 回「川の日」ワークショップ関東大会
○日時：2013 年 10 月 6 日（日） 10:00-17:00
○主催：第 9 回「川の日」ワークショップ関東大会 実行委員会
○場所：東京農業大学 1 号館 142 教室
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1764.html>

■隅田川水系文化展
○日時：2013 年 10 月 11 日（金）～18 日（金）
○主催：隅田川水系文化展実行委員会
○場所：台東区立隅田公園リバーサイドギャラリー
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1766.html>

■第 13 回川に学ぶ体験活動全国大会 in 新潟見附
○日時：2013 年 10 月 12 日（土）～14（月祝）
○主催：川に学ぶ体験活動協議会
○場所：見附市アルカディア小ホール
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1685.html>

■琵琶湖外来魚駆除大会
○日時：2013 年 10 月 13 日（日） 10:00-15:00
○主催：琵琶湖を戻す会
○場所：滋賀県草津市津田江 1 北湖岸緑地
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1762.html>

■第 11 回川の自然再生セミナー
○日時：2013 年 10 月 17 日（木） 13:00-17:20
○主催：公益財団法人リバーフロント研究所
○場所：月島社会教育会館 4 階ホール（東京都中央区月島 4 丁目 1 番 1 号）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1759.html>

■第 20 回河川整備基金助成事業成果発表会
○日時：2013 年 10 月 21 日（月） 13:00-18:20
○主催：公益財団法人河川財団
○場所：TKP 神田ビジネスセンター ANNEX
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1768.html>

■第 6 回 いい川・いい川づくりワークショップ
○日時：2013 年 11 月 2 日（土）～11 月 3 日（日）
○主催：いい川・いい川づくり実行委員会
○場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1635.html>

■皆様からのイベント情報提供をお待ちしています！

全国で河川再生に関わる様々な行事が開催されています。ローカル情報の PR や共有を目的に、皆様からの情報提供をお待ちしております。（JRRN 事務局）

(海外の河川・流域再生に関する主なイベント)

- 2013.11.1-3(昆明/中国) Hydropower 2013 and 3rd International Symposium on Rockfill Dams
- 2013.11.12-14(仁川/韓国) Smart Water Grid International Conference 2013
- 2013.12.4-6(チェンナイ/インド) HYDRO 2013 International
- 2014.1.7-9(シンガポール) 7th Int. Symposium on Environmental Hydraulics ISEH
- 2014.2.24-27(パース/豪州) 35th Hydrology and Water Resources Symposium
- 2014.6.23-27(トロント/カナダ) EcoHydraulics 2014
- 2014.9.21-26(リスボン/ポルトガル) IWA World Water Congress & Exhibition

書籍等の紹介 Publications

■ PRAGMO 日本語版 河川及び氾濫原再生の順応的管理に向けたモニタリングの手引き(2012.11 発刊)

- ・発行：ARRN, JRRN
- ・監修：白川直樹 筑波大学システム情報系 准教授
- ・翻訳：JRRN 会員ボランティア（10 名）
- ・編集：筑波大学白川（直）研究室『川と人』ゼミ等



※本冊子の入手方法

本手引きをご希望の方は、JRRN 事務局までご連絡ください。JRRN 会員限定サービスとさせて頂き、送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。非会員の方は、JRRN 会員登録（無料）後にお申込下さい。

info@a-rr.net / 電話：03-6228-3862

■ 川を活かす・守る～河川再生事例集～ (2013.2 発刊)

- ・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関
- ・編集：日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）
- ・発行：公益財団法人リバーフロント研究所



河川再生に取り組む市民団体や行政機関の方々に、それぞれの活動を始めたきっかけ、目標、活動内容、今後の展望などを執筆頂きました。

※本冊子の入手方法

左記と同様の方法でお申し込み下さい。

■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず**無料**です。
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、
所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご
参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

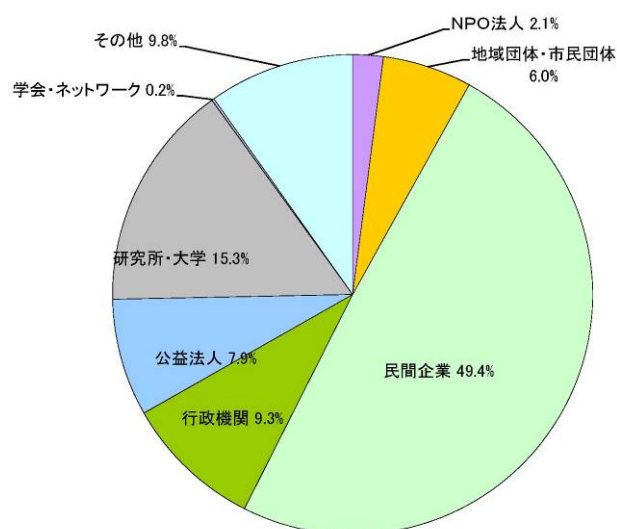
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」を
ご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した
「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信され
ます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が
入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加
することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集
の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベ
ント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川
再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援
を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2013 年 9 月 30 日時点の個人会員構成
(個人会員数：630 名、団体会員数：52 団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】



日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局
公益財団法人リバーフロント研究所 内
〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 新川中央ビル 7 階
Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

